清國漂流圖序

治化所布聲教所及異域寰外猶是一家是以見舟船時遭大風洪波之變彼我漂到輒相為應對接遇逾其涯為蓋夫為其變也陰陽漬淪之氣海潮怒激之勢天輪軼而高山湧地軸拔而深谷裂怪異萬萬不知所終則使人心迷瞻落手足不以得動術策無以所出而至大艦巨船出没有無乃遂顛覆云以是觀之治化維布聲教維及之日幸涉風波之變得接遇之涯非天祐之所致眇眇之身豈敢能也天意可恐不可測矣維時文化庚午秋七月府下船長久會自琉球歸其船長森山貞次郎及舟子善助以下共二十八人（放洋之後舟子長十者薑海光善五郎者以病死）各有專掌二十二日己時出那覇港放洋數十里風稍壯不得復引回至二十四日陰雲晦冥風浪頻狂帆綷連斷漂流日夜進退無據於是合船一心禱神求救剪髻以代己身投之海猶且截檣剝載將或輕浮有所免然不得其便橫暴之極危險備至巨浪從

禱神求救剪髻以代己身投之海猶且截檣剝載將或
輕浮有所免然不得其便橫暴之極危險備至巨浪從
船上過者數次當此時船身播蕩入水水深六尺許空
共作江魚肉者必矣衆僉不能防其急嘔伏絶倒相枕
負次帥善助不屈于此按劍疾視勵聲曰窘迫如此殆
不可免極力盡術可以卜天命衆中得氣起者僅六七
人防滲塞漏頗得其術且更取柁立以為檣帆之而與
波上下則噓噏之氣亦如少緩然以不啻其一時激盪
之比故疾風時起為雷為雨如怒如振旋轉凡四十餘
日困阨凡五百時許八月晦日船遂破於是急出小舟
駕之其窮不可言時適有漁舟到乃為其所救漁舟行
四晝四夜九月四日晚晡入大河口洄河數里抵津泊
明且同舟二十六人舉疌更生陸續登岸即是為清國
江南省也蓋其終始所以克耐窮而得今日者無他嚮
所禱之精所感之應貫終始而有然也則何啻死灰復
燃暫而吏人來問其狀負次帥因筆談條陳以告其情
自此而吏人監護負次帥以下二十六人驛送續食水
浮陸行凡一千數百里遂到浙江省乍浦而止自始登
岸起行至留止于此官吏時設燕饗數效物儀懃懇不

岸起行至留止于此官吏時設燕饗數效物儀懃懇不
置慰藉甚厚如里人亦來訪寂寞贈以盛意冥契一如
舊故奇合互非新識殆至拍肩交膝也旣而及送還之
期則開宴以供餞送且與衣服及行旅之具特見其鄭
重也如里人亦儘儀有其等官嘗命選二大船以充送
還之用乃以十一月二十六日十二月四日兩分二十
六人使各十三人以小舟至泊船所遣人護歸至是官
吏里人與俱無任天涯分手恨淚沾襟情寔千歲一
遇哉五日乘曉起椗開洋又浮沒風濤之間者十數日
而二十二日遂到肥前長崎港於是鎮臺召負次郎等
諮詢問尋負次郎等事無巨細以實陳白則公事畢明
年三月鎮臺命還二十六人鄉里乃皆得安歸也葢負
次郎及善助少通文字是以艱險之中力編記其狀名
曰清國漂流日記雖其記以國字其辭屬鄙近頗有詮
次乃左近允紀嘏西清美肥後盛邑取記以推象問疑
以得信而為之圖四十三目分為三卷紀嘏又寫其記
於圖中圖在左則記在右圖在右則記在左與圖交互
與記照應一披卷則自那覇揚帆之狀而沈迷千波萬
水之中以至清國接遇之委具極造意指之席上嗟乎

水之中以至清國接遇之委具極造意指之席上嗟乎
其一葦頃覆之難實命之所懸悲之所極至無言以可
盡而使觀者黯然斷魂誰能不悲乎乃其悲者則亡論
已然今而言之則亦為不能無可喜何則幸涉風波之
變得接遇之渥而況山川風土之勝珍奇瓌偉之美玉
帛燦爛之文琴瑟交錯之音親得之則如其變幻絶妙
之微想像之所不得而至者亦盡畜之而依然猶存于
心目之間乎於是予疇昔之所悲今日之所喜而或足
以萬里壯游為之說故今而言之則亦為不能無可喜
也而所以然者非天祐之所致耶耶之身豈敢能也天
意可恐不可測矣然則不可苟以觀喜悲於圖與記可
察喜悲之所由來何如也遂列擧其梗槩以為序云

文化甲戌冬十月

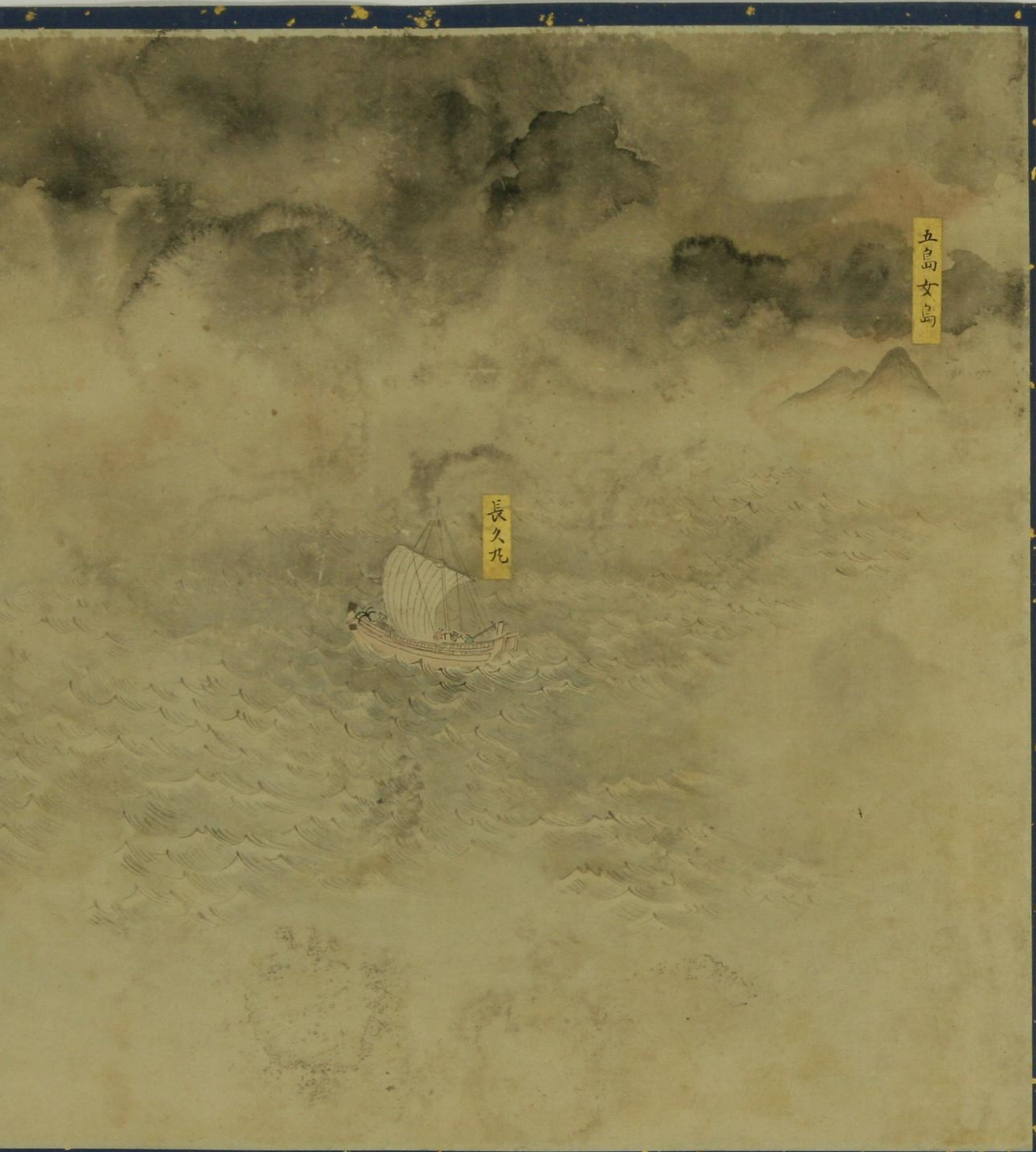
太史橋口善伯祥甫撰幷書

橋口善伯祥甫

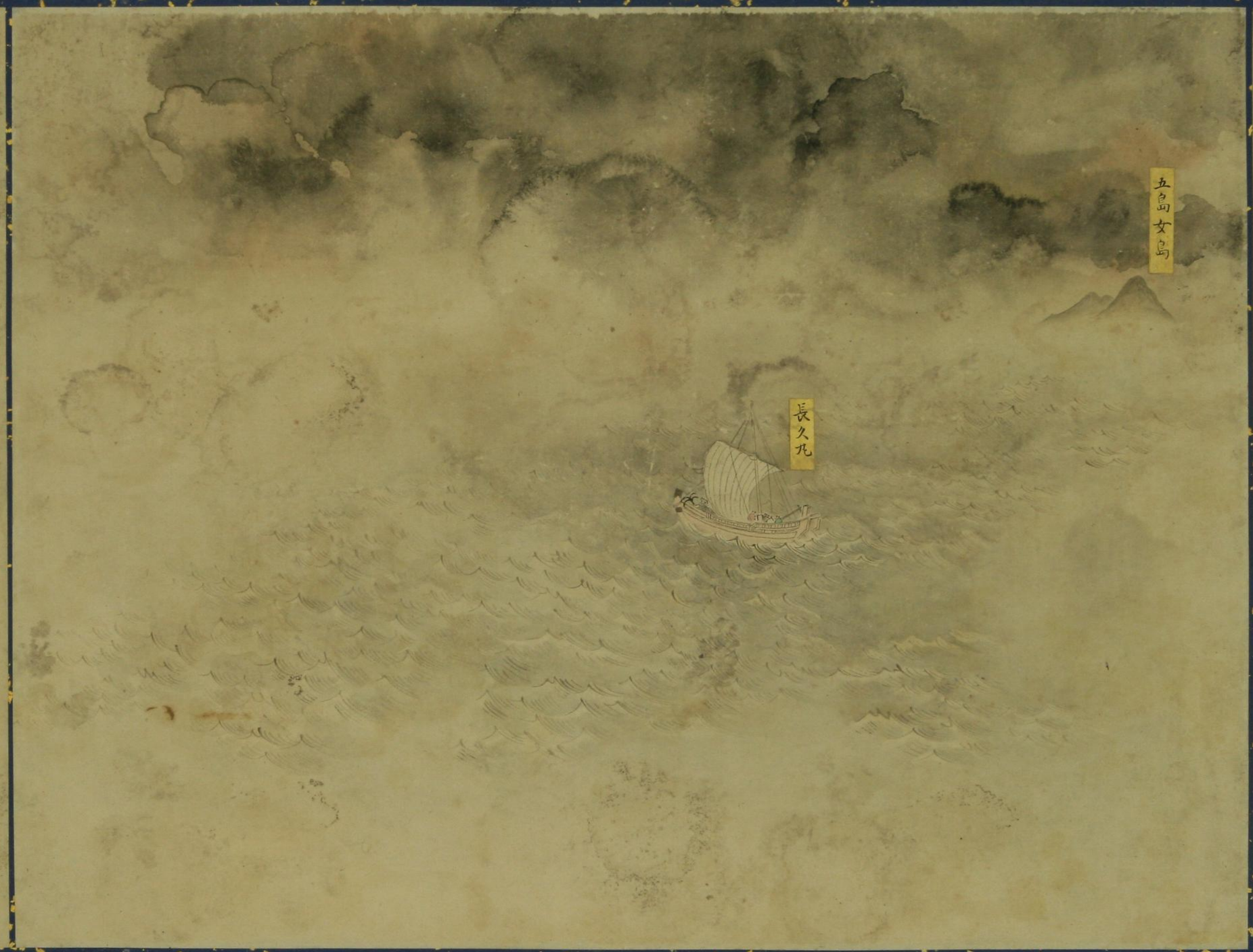
○文化七年庚午七月廿二日 晴天 東風 朝四ツ分那覇ヲ発船帆かゝ船大賓凡八
時ヲ乗ル琉球國王上の前伊平屋島ヲ三里許を経て東入
○七月廿三日 晴天 風向 七ツ分より東風 ヲ発船大島の沖
且て東ヲ走る 十八里西ヲ走り ○七月廿四日 陰天 東風 風強く天象ヲ
庚ヲ乗ル 七十里の海上を走りて不及其使潮帆ヲ
八ツ分ヲ帆掛ヲ以て表綱を捕ヲ

○文化七年庚午七月廿二日 晴天 東風 朝四時分那覇ヲ漕出帆かゝ船大寶丸ハ
路ちを廣ク琉球國ゟ上の前伊平屋島と云へ所ゟ三里許を経て夜入
○七月廿三日 晴天 風同 七時分ゟ東風ゟ東の方十里許ゟ島島ゟ掛子
丑の方ふ走る 当番は大島の沖 十八里西ゟ ○七月廿四日 陰天 東風 風強く天象よ〳〵く那覇へ承
庚寅ゟ漕ぎ海上六七十里の所ゟて不及共停泊帆ゟて ゟ世共夜
八時分ふ帆柱をゝし表綱を押ゟ切ゟ俄ゟ成強く帆ゟ破ゟ波ふ浸ル
ゟ〳〵ゟ極ゟの所ゟ綱をゟて夜の明方ゟ御繕者者ゟの風ゟ次第ふ強くゟ丑
の方ふ向ひ ○七月廿五日 陰天 東風 風甚強くかゝ処ゟ大寶丸ハ朝五時分ゟ
帆柱折ル丸ゟ丑の方ゟ走る

長久丸出帆
漁舟
三井城
大寶丸



〇七月廿六日 陰天 東風 風並益すくく五時分東の方ふ迄女小島乃毛共嶽如所ふ
多分見ゆ五島の女島うらんと丑の方ゑ走船 〇七月廿七日 陰天 東風 波浪強て
本船難儀先程をさを前ゆら拾風ゑ任をく流をんと ゆ多小島ゑ朝鮮
国ゑ地方ゑ又遠かるようと帆柱切らんゑ成らむ風ハ次第ゑ強く船中一同ふ
驚ゆ切らくく祈願を掛如

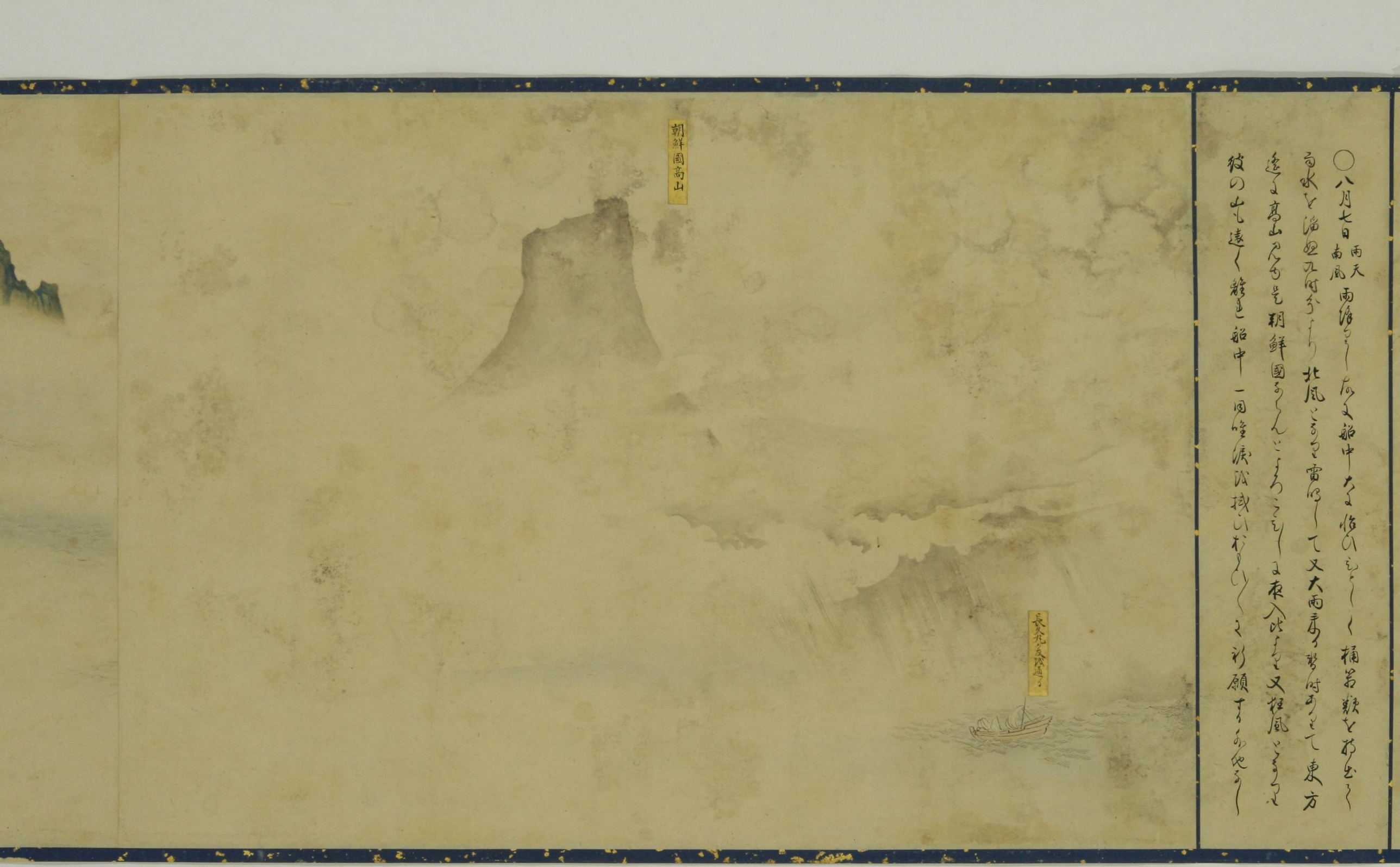


○七月廿八日雨降つゝく大風にて船既に危さ甚敷殆沈んとす柱を
きる此付水主種子島の長十といへる者帆形みゝきて溺死を共みの者
ども或いは重傷 或いは疵所 てあり用ふすく兎角とかく大波なく
船沈こゝろの三度艪臣の由播立も甲斐もなく釣合宜のくと絶ふ枕沈こと
形 如せき入水の潮凡六尺波高き事と共に花越あり中や共間垢い
益増るといへども船底の拒方もさすが沈没除んと以考もなくかくては
沒底するものゝと吉助勿左衛門由人寄沈に影くけ垢をくわもと以種子
島の者共昔考い幾度沒とも不及なくく我々ふ所ふ由人抵沈なくよ由ふ

波と成すること多くして吉助兄弟二人共に舟に乗り合せ居る人数に種子
島の去共者なり幾度波とも不及ること我〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
刀にて抜て彼の去にて手負て捨んとすれども疾船底なれ〇入てはなり〇〇〇〇〇〇〇
ものとすれども いきもしたる六七人進出て此と〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
取入に付分られ申し風和く〇七月廿九日 晴天 南風 風和くして船中 安寧なる〇〇〇〇〇
ほ〇〇〇三日の内名護屋に皆茅島に入て起居するのみ や〇〇〇休息 又
垢波ふ取掛り凡三里程波千 蒲團にて船底よりくわ 垢水にて ふ〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇の後風に任せて流れ少く波〇 色〇〇と工夫ふ濟と釜をとり立めり〇にて
波んとすれども水〇〇〇〇〇〇〇 一人我能水の賣方にて 之年臺湾國に漂流
ほ〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

丑の刻より漂さしく　此日八時分より渡海成難とて馬海之

○八月七日 雨天
南風 雨降りしかの文船中大なる修のもうしく桶若類を形ゑく
白水と泡迫五間ばかりより北風ごうごうと雷鳴して又大雨青く彩付あとて東方

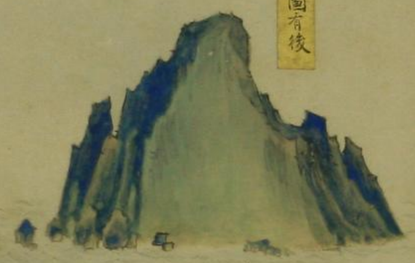


○八月七日 雨天 南風 雨降りしたのち船中たゝ修のみにて桶等数を拵出し
雨水を溜置候分なり 北風にて雨来りて又大雨来り殆ども東方
遥に高山見る 朝鮮國なりとこゝにて夜入候ても又狂風にて
彼の山も遠く離れ船中一同唯涙流し拝願するのみ

豐島之全圖有後

長久丸左路通ル

○八月八日（雨天北風）九時分より小島之間を船中揺動す石斜に流れ流れ漂と為んと
なりしに又彼島ともを通る狂風となりて彼の島示遠く隔て吹出さるる云
ふ九五六里西北の方に流れる○八月九日（晴天南風）島影を見ず
島影多飛鳥沈没し人家ハ朝鮮の地方も又遠かりしと東方に流れ漂ふ
火魚とて鯨八許の魚多く船尻に群集すと称する数度なり○八月
十日（雨天北風）四時分より又大なる南風と北風となりて南の方に漂ふ
いろは丸の漂ふ迄なるとよ狂風起りて方向を忘れ遠く離れ如何ぞ
沖永良部島の者五人琉球迄去る人あるを呼出して各々言ふ
異国漂流の例ハ極て沈没する先例なり此度六人乃髪無沈刺と大和
衣服なるを見て日本人の船なりと○八月十一日（雨天午風）風強く波高くして
又難儀なり○八月十二日（雨天暮風）昨日見掛たる小島へ漂ふる様入る
凡一里許と為て比船より火沈主なるを彼の島ともも火合を形く
船中大なる騒ぎ陸命し一命を助らんと議する
変病者の苦を助ける者ともなる苦と狂言なく左りなく四時分に成り
空しくなり如き死骸を移す入るく船中を搭載を級風ハ第ふ
わるさこの島ふちなる紀なるとは廻るさ迄許のなりとは丁度と真ゆ
朝鮮国の属島なりて三十五六里城壁と人家多なりき



世島之全図有後

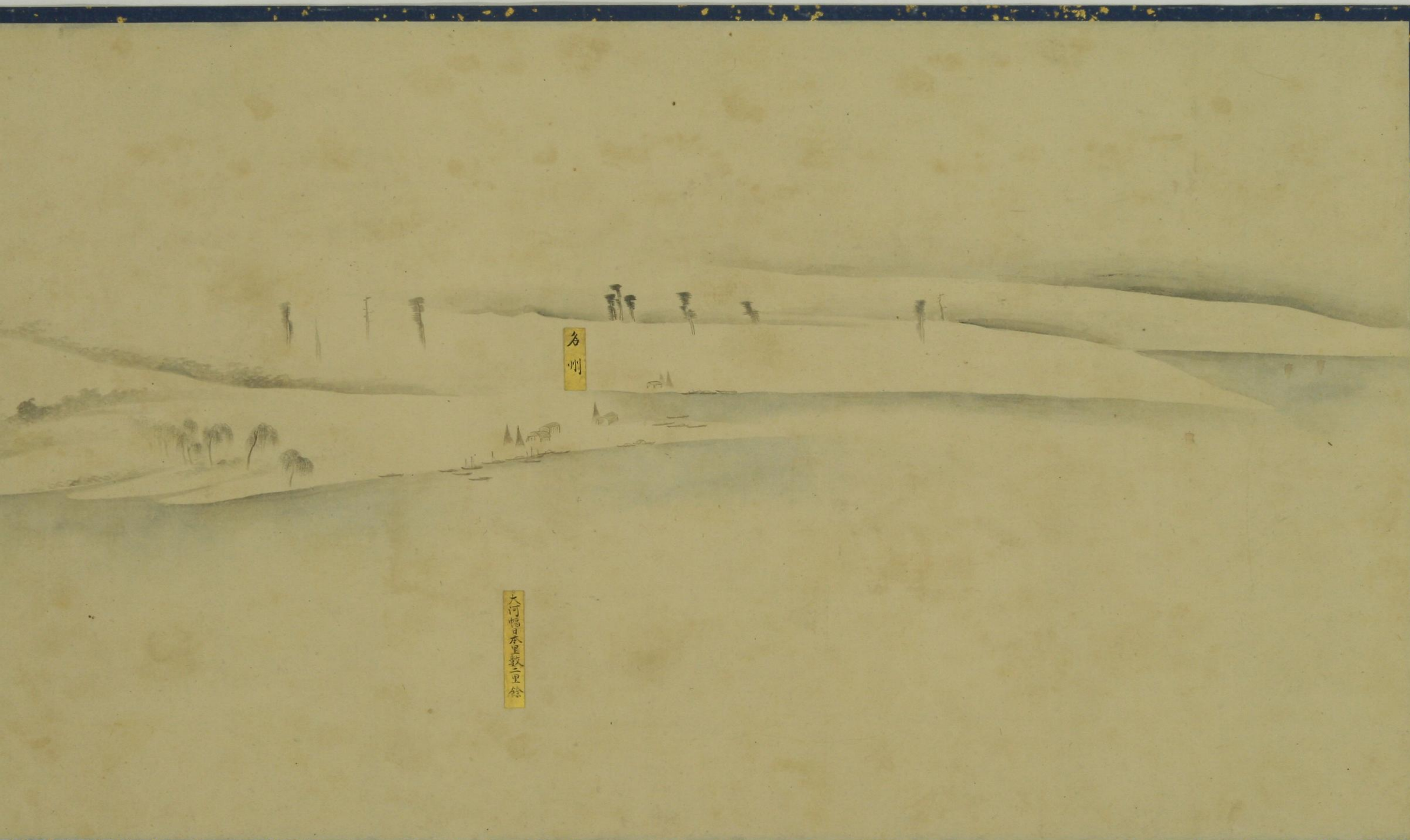
○八月十三日 晴天
北風高く 近海の岸下小濤こゆきたちの巖石嶮阻みて
人の通ふへきかたもなく向の岸下小舟毎に波
に破碎されて

○八月十三日 晴天 北風 夜ふけ近き山岸下に漕ぎ寄せ巖石嶮岨にして
人の通ふべき路なし乃ち碇泊入港を繫ぎ居る向の岸下に小舟三艘
あり槽船泊まり村内へ少き漁人六七人系組岸辺に槽乃ち是は
朝鮮人海多立いて漕ぎくゝ少き漁を揚げ居る所に船を繫ぎ
いかりを下し乃通水船を拵へて出べきの支度をなし村内へ入り又小船
三四艘東の岸下に乃ち船を繫ぎ居る所に船に書字紙書
及びすふ乃通水なり上方紙をみ桶に水桶を入れ毒の無色池盛を
欲せざるを数盗紙をもけ 夜入村分彼の者共呼び評議の節て村乃方へ槽
たく船つゝ拵へ
今日如○八月十四日 陰天 北風 又東の方より小舟三艘槽来りて水拵へ無少
廿四人の老若男女いとなん居る頭に頭巾を掛の毛の帽子紙載き乃ち面
紙人あるやと上方紙をもて頭紙ぬぎ不音船に朝鮮船も乃ち出す拵へ
大変をなして南紙にして槽を○八月十五日 晴天 小風 風甚強く碇を降ろ
繫ぎ留めかゝる 程なく素より船に拵へ乗り遠風を通ゝ一番
島人又畜生ふ乃ち是非陸船に何と待ちて朝鮮の地方に約い差乃し
歩通始へ本船より漕ぎ出りと沉い是大魚に餌とるゝと大槽船又
ゝを乗り出口乃海へ槽り村人追ゝ走いて大音ふ叫びゝ
群集して洗濯へ上せ何者すなはち磯紙面のめくる抛て為ぬ者
抛ふ是非のさ仕合ゝと又本船ふ槽虜○八月十六日 陰天 北風 此和紙やゝ
本船紙ふいかゝ乃ち漕ぎ近寄ゝ紙ふ急ふ碇紙卸して繫ぎ留め陸に
りゝ乃ち漕ぎいてんとする風いなく進退窮み拵ふ○八月十七日 陰天 北風
此處ふ津ゝて益ゝと風ふ任せて碇紙を抜て漕ぎいて如先本
島紙繫ぐ事 漕三丁ばかり有ふ溝を繫ぎ乃ち
○八月十八日 晴天 東風 何所とも方角なく酉の方へ漕ぐ○八月十九日 晴天 東風 風波
苦厳く大難成ふ行ても分ぬ乃ち死人い若五印大波ふ乃ち枝
ちまく乃使ふ仕合ゝ○八月廿日 陰天 東風 風波如き申の方ふ漕ぐ○
八月廿一日 陰天 北風 八河分海上色のめくる乃ち浅瀬紙出ると乃ち
二十艘ふ乃ち見紙以く唐土ちく漕ぎ乃ち紙書乃ち○八月廿二日
晴天 無風 海次第ふ漕ぎて船進退せと又何霧といふを乃ち○八月
廿三日 陰天 無風 船乃ち紙入ると繫ぐ○八月廿四日 晴天 東風 五河分乃ち
小風出る乃ち又紙乃ち入る○八月廿五日 晴天 北風 南急ふ矢板の
船に乃ち西の方へ漕ぐ紙乃ち書ふいかゝ乃ち紙ふ船に乃ほとせ
四乃ち彩河乃ち紙を以く本船乃ち船に乃ち我く彼の船ふ乃ち
江南商船と大書してある先水乃ち船頭に乃ち去書ふ
水と大指仕合乃ち入て無ふ深ふ乃ち仕合乃ち一日乃ち紙
厚禮紙乃ち如是天の我書を叫乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち

江南商船と大書したる紙書寫すると船頭いろはに去来ふ
水と大樽迄分ちとりて入れて無ふ深ふ所をかくして仕合ふと一回は拒絶
厚禮成ると如是天の我書を扱ふらんとふるまふ又干魚を成
無へて叮寧ふる仕合ふる唐人紙を扱ふ是ふ書寫せると仕方成
ふるとのふる貞次郎筆成扱ふ我生國日本薩州之野夫也逢逆風船損漂
流日久而無水願貴客垂憐可賜一桶之水哉又問洋海何邊幾許日而可到
地方否答中元正片西弐字去有風三天在高李正東片弐字去有風四天我
書寫船ふ来度ハ多ふ人数多ふ故ふ仕合厚禮して本
船ふ来物を如其船ハ南成ふして走ふる○八月廿六日雨天東風風波次第ふ強く
ふる波ふるふる又西の方遠ふ入日の影ふ小舟船多乃ふ○八月廿七日雨天東風風
波甚強くふる幾許の波ふ入ると八何分ふ洲ふのとふ第四せんと
すふる大波来ると成ふ波ふ出ると書ふる波四方船ふ波と
掛ふ又洲ふのふる事三度ふ及ふ如相ふ成ふ波船ふ
見命成ふ物ふ先碇成入ると成ふ碇ふ一面の干かいふふて
物毋ふふ波ふ成ふ物ふ絶来難成して来とあり如○八月廿八日晴天西風
風甚強くふる霧ふ成ふて四方ふ小舟ふ
毋ふふ一向ふ来船ふ近ふふ成ふ或ハ多物成ふ
招すると不来ふ入何分ふ皆走ふる○八月廿九日晴天東風波静ふ成ハ碇成
巻の如五六里流ふ成ふ又波ふ成ふ
魚の漁毋四艘来ふ物と巻ふと出して書寫せると仕方成ふと成ふ寫
投ふる共物成拾ひふして走ふる共文云日本人逢逆風漂流救我書

救之漁舟
救之漁舟繫ハ一張

○八日 陰天 東風 海おだやかなる事船洲ふのりを拾ふ終に破船を石ふ有りしなり
大小の格船うの内助かるんと用意をせしうち八反詰の漁舟二艘来りて
俗うの驚を恐れ乗組の者三人格船ふりて漁舟に乗移りて助呉れと云へども
聖問いたらず者かるす今晴るうて夕方の潮の格るうに及んで
夫うの一回今日うの格船よりを乗て到る如先船い妻子ぬけ出せし故合
十七人乗組うり則彼の女弼とくくせて玉拾叮寧るうり又三人船の表よ
うり法螺貝吹鳴るよ小舟聚集るり船者物ぬ奪
かるうり格子うるも取入る者の方うり向い走る○九日朝日 陰天 東風 朝霧の
間う舟船多往来を乗組の者人二人合て年長三人ぬう酒ぬ暖め組板るう
者ぬ沖あけり海日を丹ふ入る進めのうりせしむ此日うるうて朝夕
の賭ふも又魚類とりうも拾又二人船ぬうるしき者者く格ぬうるてあり
者うの大悪相ぬして乗組の日うり一言の言葉もるく恐いぬりしくなりて
終夜い移りしを○九日二日 陰天 東風 今日もまく海の渇ぬ走り○九日
三日 陰天 東風 昨日ふかう事るく地方いてもいまくしく



終夜い[illegible]〇九月二日 陰天 東風 今日もまゝ海の渡り〇九月
三日 陰天 東風 昨日かゝる事なく地方いてもいまゝ[illegible]

一丁許
枚川幅二丁許
萍州
大河幅百五十間
二里餘

馬鞍山
蓼上陸
一丁許

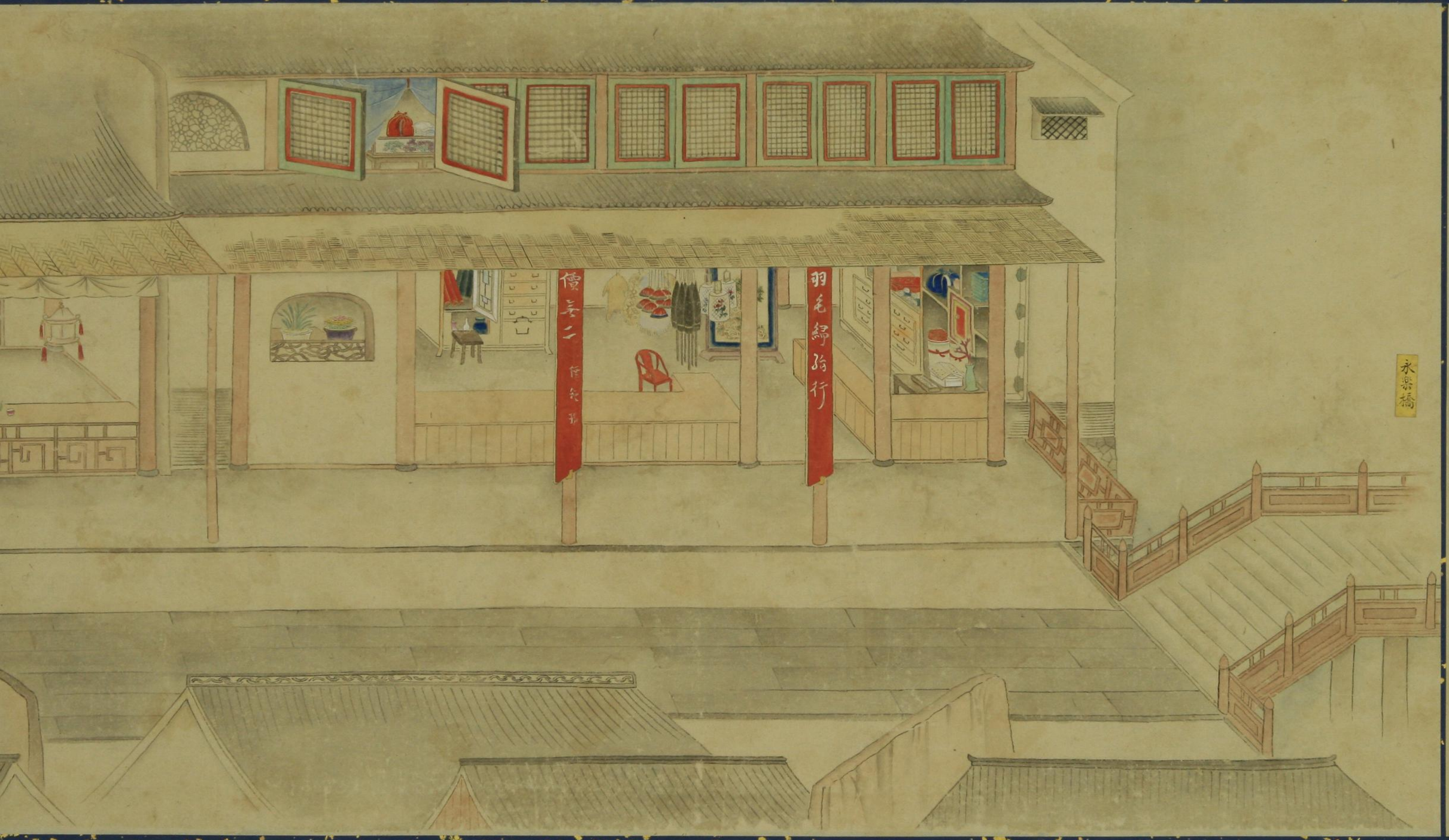
○九月四日　陰天
　　東風　七町分横幅二里許の濱と称する海入口数の迫毋二艘
賊の舟又船を横おもりて賊の儒米数賊一艘ふ船一艘ふ人数とのも
共米積るい南方向く走る船中の少婦汐水賊ものく数を数くなる
いかしく美い海中多賊入るもふ水ふ　のちふ地て海門の大
河といふ賊走ると夫ふを河多海るふ凡二里許ふして左の河岸多船を
繋如唐人のいふ兵庫ハ海門市一の繁所ふと称せり　左の岸ハ好く
戸陸へ列り屋といふ言ふ我曹皆心得をみるを賊乃ふ多威くやを
陽豪ふもう人家多羅列をいふを官所ふあるふ　左の方ハ
人家も乃ふを繕多茅屋のみあるて廣望蒼茫たり旁以い婦し賊
心驚人屋かしもこ急く船頭の握ふる枕賊奪いを我人数をりく河ふる
走入くい塘下ふ引を如へし　彼ハ小人数ふりの枕場ふに見ふ如とたる
怒もろ驚ふる　唐人賊悪くかし　のけて枕賊いを出ふんとを付ふ
船頭我前ふ跪き合掌して乞ふ乃多浮ふへ以ふの姿をもを作白彼ふ枕賊
いふ乞て戸方の方ふ向て走ふ少き岸下の足場好所多船賊驚乞点ハ陸部
成雖とあふ賊ものふ如

船頭拍前ゟ跳さ合掌して乞ゆき岸下の足場好ゝ船頭拍子に夜ハ陸部
いろ〳〵せて所方の方ゟ向て走ゆき彼ハ花川
成雜〳〵とあるゝ成まちゆ

茶坊休息之所
肉饅頭壹貫
村後二人
僧
二丁許
輦

○九月五日　陰天

未明小陸郵せしふ船い所走なる人家ゆ雨と降るなり
河幾海にて与る屋かゝと山高又ゆ高くあるゆ沖岸綿漠ゝて渡
な〳〵北の方ふ山高北嶽二月ゆ白共ゆ白ゆ雪ゆ積ゆ又左の方ふ小島一ゆ
見ゆ小いへとも霧く塀てゆ白ゆ雪ゆ積ゆ蘆原ゆ怪原ゆ
唐人婦ゆ白ゆ素ゆ多ゆ鶴ゆ舞ゆて高ゆ白ゆ頓ゆ又十人許ゆ素ゆ見ゆ
男女遥く群ゆ共ゆ二人い役人と見へて目ゆ立寄ゆて曰你是何國
何故此地来哉ゆ答ゆ寄ゆて曰生國日本之野夫也遇逆風此地漂流ゆ
ゆ若助ゆ答ゆ寄ゆ唐人ゆ扶携ゆて近邊の茶坊ゆいゆ菓子類ゆ出ゆて
屋廻ゆ極ゆく輩数十車ゆ控来ゆて我等ゆ物ゆ求ゆ唐人数ゆ艘ゆ
河渡ゆ七丁許ゆて永楽橋といゆ橋ゆ渡ゆ奇麗の街ゆ家ゆ
凡ゆ丁許ゆて一彩の田舎ゆ渡ゆ城ゆ改ゆ上ゆ吸ゆ又ゆ市中ゆ
過ゆて



凡六十許ヲ以テ一彩の田舍ヲ添ル故改ムル所ハ
ヒトシテ
又市の市中況

酒坊

肉店

品々知れ市
菜店
肉店

圓海寺という寺より宿へ帰り人五人ばかりなる如絵画の人形同じ

○九月六日　晴天　藝国の官役数十人来りたる十里小名州という城壁町

のと又十里小萍州という城下あり夫へ送り屋にて市中の茶店へ

ほどなく飯をすゝめ極るく華麗控来て我為物をとりせ去役宰頂して

少さ如みちすゝ是物の男女書象九何分名物とゝ名ゆゑ到来して

二彩の茶宮人宿さき彩い唐人さき彩い日本人おりゝの卓子腰かけ

ゆるゝ物何体見て畿是をやゝ道い唐さ棉畠ゆて川多く處

変ふ茶坊城接人八何分

日本人荷物
宰領之官役

薩州の城下ふ多間店酒坊さみの店屋義弐あり て廣大なる目と

薩摩の城下ふる屯店酒坊茶みの店屋義城あるして廣大なる門を
はいらるゝ姫夫人を玄関を大門城入を玄関の尾長竹の組代城
きさて左右を座せしむ勢付あるして玄関異様の奏しして呼しむ人
いゝ〳〵西面の形ふ倚を朱書して你們是何國何故此地来哉答生國日本之
野夫也過逆風此地漂流と書寫し姫彩色天竺字昔助城後堂〻携しく
官人西面ふ椅子を〻倚を子のみ掛く緋城かけ高さ机城も紀銀の竜筒并
茶硯彩紙筆城硯如右脇へ高さ五尺許りして四角なる朱塗の中央様
なる物あを上を巻物城かけ中の棚なる服紗包の箱城重なる ましを
皇帝なる附て〻彩く光る物ならや左右ふ玄関近掛して三十人許なる
屋あを大官人を〻問る畢て役人を城なる一国を玄関といて七八丁
列通を瓊瑤廟ならゝ〻窓らしむ 廟ハ関帝城安置を

宮門

玄關
葉子賣
麵類賣
每宮菜如形有
饅頭賣

○九月七日　晴天　おくまに付添の女役ゝ多くして茶碗皿数を買ひ頂し食ふ
廟前の茶店ふ列ゆさし卓子臺五拾脚位ゝ多ふ事一日ふ三度ほどい丼三
一ヵ所鮫肉ふ茎蘿蔔一ヵ所魚肉ゝ豆腐蒲生一ヵ所鶏肉ふ赤茎蓮根ゝ多くして　小皿二一ヵ所ゝ茄子乃
大形醤油ふ地ゝ多　我邦の味醂ふ地ゝ多ゝ
蘿蔔の漬
漬おゝ
皆無ゝ
皆無ゝ
皆無

[illegible]

十六錢を並ちて[illegible]の門口より凡物の人[illegible]を[illegible]せしき少く[illegible]を非

廟ふ[illegible]を如[illegible]皮役小札[illegible]表て[illegible]し官長法令甚嚴不可街

坊遊玩答所下之法令速可聞衆多罪[illegible]○九月十日 陰天 [illegible]ふ凡物の

人多く廟内へ[illegible]入[illegible]の皮[illegible]

首枷[illegible]を[illegible]を如○九月十一日 陰天 役人名い菊[illegible]

表[illegible]表[illegible]日 饅頭[illegible]多く[illegible]

勝[illegible]いと婚[illegible]ふて日本有饅頭否と問ふ答 多く有と答[illegible]如

又日本人半髪而貌醜不好と答 大清人不好毛少有長尾似獸と答[illegible]唐人

一同[illegible]ふ吸て云○九月十二日 陰天 廟の近邊ふ茶坊藏[illegible]表[illegible]

三十餘名を練[illegible]

宵風と表て[illegible]を招[illegible]少[illegible]何事やらんと[illegible]

いて[illegible]表[illegible]

一刻の茅[illegible]入火[illegible]

婦人二人いて茶[illegible]

[illegible]胡[illegible]

[illegible]

[illegible]

藥と[illegible]醫二人表て[illegible]

唐人[illegible]

[illegible]醫の名[illegible]

今[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人數[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中之急桁大人將米貨准賜於汪源財則亦已免罪衆大人之恩俱能報答而
金其美若情願賜必然要立憑與汪源財庶幾脫手寃枉萬謝大人○九月
十五日 晴天 屯廟の大祭ありて人五千人許異樣の旗數流
持參り形何ありて道樂乃音中へて女人の行列廟内へ入る 官名 本藤自寫
曰今天人集會日の刻許く関帝の行列傳り一丁大旗朱の大傘流之
女流い童子十四五人許 地主 皆赤い首枷流入或い裸ゆして両手流て屋上の
之ふ流燭と燒く或い鎌流首ふけ引廻さるるして者罪人の容流ゆ如
あとうと樣く緋毋金線の絡て寺る衣流着るる僧十人許詠流りて笙を
吹き又其側毋銅鑼流ゆるして終日市中流縱横とろの実樣ゆ驚くく
ゆゆ扨廟内毋い近つゆゆ日本人流移ゆ見人組の人絶ゆゆ果杯
寃義いと豆乾餅多杯来つく贈ゆ毋○九月十六日 陰天 扨同系組のうち
琉球の大城親雲上ゆく者先達毋日本人の家ゆ来ゆ彼ゆ人ゆ
ゆ再琉球の在とゆて友ゆ少き書寫して曰我是中山之大城親雲
上者爲屬島伊平屋之小吏僮僕樣主共六人乘小船發那覇河口洋中失風
漂流到日本薩摩海内佐多御岬船破五人溺死我獨得生托此貞次郎船將
至將軍府城不幸而又遇逆風終来此地庶幾垂憐送我福建館内有こす
六人友ゆ呼ゆ官人ゆ者ゆ引渡ゆ大城親雲上ゆ右の書流ゆて
雲上流ゆ〻〻と驚ゆ廟内ゆ帰ゆ如小官多杯て琉球ゆ大清の
支配島有大城ゆ者ゆ旅宿流ゆ福建へ送有ゆ毋○九月
十七日 晴天 役人ゆ者ゆて書曰此去行九里許有罕丘邑二位可遊玩的ゆ者助
貞次郎ゆ使ゆ事一里許ゆて一村の茶坊ゆ豚肉ゆ煮ゆ酒ゆ
ゆ飲ゆ者ゆ又ゆ五六丁金砂廟ゆ入ゆ正面ゆ大ゆ金佛ゆ流
安置ゆ右の一間ゆ卓子壹流設ゆて座ゆ為ゆ者ゆ経ゆ書ゆ者ゆ
古物ゆ多ゆて見ゆ中ゆ水晶流ゆて布袋和尚の高ゆ六七寸許ゆ流
彫刻ゆ者ゆ有ゆ細工の密ゆ毋ゆ目ゆ驚ゆ如ゆ者ゆ
多杯ゆ者ゆ真ゆ筆ゆ為ゆて他ゆ者ゆ使ゆ者ゆ
之ふ流ゆ中ゆ刻許ゆ廟流いて村内ゆ子ゆ三五ゆ酒ゆ飲ゆ者ゆ衣入
五付ゆ者ゆ帰ゆ毋○九月十八日 晴天 役人ゆ者ゆ来ゆ者ゆて大老爺 知縣と同官
ゆ廟内ゆ入ゆ者ゆ人数皆驚流ゆて行ゆ者ゆ経鋼鑼流
ゆ失徒三人次ゆ者ゆ道樂ゆ者ゆ三十人許流ゆ者ゆ廟内ゆ入ゆ者ゆ正面ゆ
椅ゆ者ゆ倚ゆ者ゆ眼流いゆ者ゆて者ゆ
呼ゆ者ゆ三ゆ者ゆ者ゆ年齡五十許ゆ者ゆ役人三人いて一人の者ゆ流ゆ
捕ゆ者ゆて者ゆ引ゆ者ゆ首流ゆ者ゆて武官ゆ者ゆ一人の壯士ゆ流ゆ者ゆて
機の内ゆ者ゆ一尺許の牛革の鞭流ゆ者ゆ捕ゆ者ゆ者ゆ首流ゆ者ゆ九二十
枝許ゆ者ゆ側の官人ゆ者ゆ鞭ゆ者ゆ流ゆ者ゆて大老爺ゆ者ゆと流ゆ者ゆ
杖ゆ者ゆて又三十枝許ゆ者ゆむ何ゆ者ゆ白木の壹ゆ者ゆ紺深ゆ者ゆ弾ゆ者ゆ数十場流

機の内より一尺許の牛革の鞭出でり其捕らえ去れば首級ありこと凡二十枚許手の側の官人へ鞭く振出すて大老爺〳〵と呼をいたれば人々ことに怪しりて又三十枚許うちむ何れも白木の豊な紺漆の弾帯数十場出載まて我子のまきこと大老爺自来まて接拭ひ之我頭出接て明撮なと多みいるとて是出るの側まあり仮人口のあるやうに老爺是人とのあるの場脇差二本出ごとしてとて出せしもく実に感心の極なる白鞘の箱の内筆の内筆筋〳〵拾護まセらるの事なり手白皮人い行列出拭へ帰るとなる又一人さもを先母は各の子のふ綿帯を飾をもはけ出いはけるとなるとふ其使へるさなる戸庫小罪出きくさ形なるとなる形て去るしむ○九月十九日 晴天

年三十許の老婆まて一紙出勝り狂風陸起趣風翻回首故園欲斷魂莫把家郷常掛念寛心忍耐待皇恩○與君本欲詰留連可惜言詞風俗牽漫説流離為瑣尾天涯遍歴是神仙○此與貴處是鄰邦今日相逢天假縁却慚微函無麗物聊将拙句贈君前○名氏出録ごと又ある名氏出録ごとある

○九月廿日 晴天 官人より豚肉十斤許贈るるふ為奉謝大老爺之恩ごと書寄して使ふ折 やまと姫きく 街の知人より酒一瓶出贈る又漆と山茶美出拭茶まて与ふ少へり扇の小箱ふ到まて数盃を傾く○九月廿一日 陰天

扇の海女茅屋の内まと考真主名い元方ごいて豆腐店より御寄こし

苦助墨梅を寄 苦助印 人道花ぬ錦 毛孔空後庭ごとく大きすく

扇子影差拭者 ありて 蘭竹の絵を寄して唐人の句又大和〳〵こもち寄ぬ

女人拙き書画出清〳〵不斜喜ふ拭ふ白羽扇子二本出ぬ

贈りいとかく〳〵いるれるうとこ○九月廿二日 晴天 苦助 苦助印 両替

屋より到まるる正銀を地まて渡さ寄ハ日本の目方ありて四分まる出

三匁五拾銭より銭ハ九〇まる常ま金の賣買より又大判のめくるる銀出

貝かの拭く製まるあり三拾貫文より通用す又銀牌まて二拾貫

まるまの價より日本の板かのめ○九月廿三日 晴天 海門ハ多く棉を

作まて産物とまて地まる上本綿二文五厘にて價三匁五拾銭まる

四匁銭〳〵より又朱三斤出四匁銭より代銭縮緬一場ハ三貫四匁銭位織子 茶ハ日本茶まて茶と云ふ琉球茶

一尺ハ二匁銭位まる上白米一斗拾両文拾八文より拾八文より

拾五の斗ハ日本の五合斗まる栗ハ一両まるまる豆類や多

一斗八銭まる又素麺とりまるまる我邦の素麺ごとく糯と豆ごと出

まて製す粉ハ牛出のてこもすまるまるより○九月廿四日 晴天 瓊瑶扇前ふ

人六人まて銅鑼出打鳴〳〵人とあの内より形より形何まるて多人量素

六人の内より年拾八許の美〳〵き婦人側へ幕を張る中より毛氈を敷き

金輪旗杖子大庭丁品〳〵拭き〳〵又異形出装束まるまる男金輪を四〳〵て

上ふ投者老こと上まる五出より次ふ旗出立上まるまと棒くの蓋をまるせて

中ふ八歳まるより童子出呼出て大く唱き其子出毛氈乃上より寝

金輪旗桙子大危丁品〻抜生〻又異在此裝束之男童輪を四〻て
上を投者色〻と走る色紙〻り次ふ旗紙立上るのを樣〻の藝をなせり
中ふ八歳〻〻りなる童子紙幣生〻て大〻嬉き女子紙毛氈乃上〻寢
か〻大危丁を〻〻抜地〻〻三ふ〻てしらけ〻〻を血滴〻と湧出実
数せ〻〻異なる〻を印毛氈を掩い如凡角の人〻織五文字紙投出ふ行を
〻〻〻いて走る実〻目もあて〻〻行〻〻り彩白唐人二人来至て書〻て
曰該處海門府地方官往江蘇省閲見上司不在衛署内代四五天同署分数
尓等回本國静候在此無用憂慮到有地方官送行○十年前朝鮮國失風到
此地有詩一首初分天下一統天你分中華我分邊中華到我承寛代我到中
華命倒懸我等一命何足惜八旬老母實可連○九月廿五日晴天唐人来至て
書曰汪源救漁舟在崇明縣官長差兵悉捕之彩白漁舟の船頭首ふ謙紙入
曰〻〻官役二人廂内〻急〻来る我〻〻〻〻大聲〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
仰天〻〻〻〻彩白硯紙出書曰救漁舟拝主在崇明縣捕之前日來此地受官
長之拷問及三日と其罪人相家のことく我んと〻〻ふ来る〻〻官人
〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

又御の者共を取集て罪人を助ける所なりと云ふを見て
昨夜呈大人之紙蒙大人諭明日獻反文今已在此候駕將反文賜下為感
大人 照

○九月廿六日 晴天 廟内へ男女五六人集まりて線香を焚て一人の老女実は
の装束をなして毛氈を敷き婦人の衣服を着て寐ねる形をなす又紙をもて
船形作りて側に置き若い女と二人ともに合掌祈る事を唱へ踊りの如く
ふ多くもなりて何やらんと思ふて不通掛すること〇九月
城邦の梓亟板なるもの病人に形をして臺地にもたせかけ〇九月
廿七日 晴天 皆列立浴堂又少き場
街頭大騒擾にて博奕にて賽を振り〇賽を振り〇賽を振る人皆是にのみ耽人
振りて日本國にも行なりやと云ふ多有と答ふ銭一文にて生
きたる小日本にて生食魚の如きもの人を見るを見に首にて
いまだ毒を振りて喰へ物〇て茶屋にて菓子を求めて飲て
廟内の茶屋に立寄ふ一人年長なる者を書曰此地中華國江南省
近東海洋有三國隔連朝鮮國琉球國倭等係日本國人氏三國内遷長有人
往來約想二十餘人在江洋内客商失風到此地江南省海門二府地界地
方官已申聞各憲不日尓等俱往江南省大憲下問明申奏中華國嘉慶萬歳
爺尓等回往本國無用憂慮尓等知之 答曰得穏心者實憑大人之深恩謝〻
誠に実情乃人〻見〻彼を遇なりて〻〻厚〻〻〻〻